



2019.10.1 No.105 (季刊)

編集 国立ハンセン病資料館
発行 公益財団法人日本財団

目次

- P1 2019年度秋季企画展開催中
『望郷の丘』—盲人会が遺した多磨全生園の歴史』
P2 「追悼 高山勝介作陶展」開催
P2 夏期イベント開催報告「ハンセン病と人権夏期
セミナー」、映画「ふたたび」上映会、「佐久間
建氏講演会」を開催して

- P3 資料紹介 その⑤ 絵はがき「東京養育院正門」
P3 研究から 義肢装具室訪問
—入所者の日常を支える道具を作る—
P4 資料館の現場から その⑪ 庶務業務について
P4 お知らせ／利用案内

2019年度秋季企画展開催中

『望郷の丘』—盲人会が遺した多磨全生園の歴史

当館では9月28日（土）から12月27日（金）まで、2019年度秋季企画展『望郷の丘』—盲人会が遺した多磨全生園の歴史』を開催しています。

国立療養所多磨全生園入所者の視覚障がい者の団体である多磨盲人会は、1979（昭和54）年に『望郷の丘』を出版しました。この本は、盲人会の創立20周年を機会として「多磨全生園の70年にわたる歴史を背景に、盲人を、盲人会を語ることの必要性」から、4年の歳月をかけ編纂されたもので、晴眼者を含めた35名の証言が収録されています。ここには、今や知ることが難しい第一区府県立全生病院（現多磨全生園）時代の患者とその生活、隔離のなかでの「自治」の模索、戦後の入所者自治会や全国組織である全癩患協（現全療協）の誕生とそれに続く運動などが語られています。また、視覚障がいのために療養所の中でもさらに「弱い立場」とされた人々が、どのような思いでその時々を生きてきたのかや、職員や療養所の外の人々との関わりが、当事者自身の視点から描かれています。本書は療養所の中を知り、同時に当時の社会を捉えることができる貴重な証言集となっているのです。

本企画展では、この『望郷の丘』に収められている証言を基に、視覚障がい者を含め多磨全生園の患者・回復者がいかに歩んできたのか、資料や写真を用いご紹介いたします。彼らの過去の暮らしや営みを知ることは、本年9月28日に開院から110年を迎

えた同園の、今後のありかたを考えていくためにも大きな意味があります。本展が多磨全生園の歴史と、そこに生きた人々への理解を深めていただく機会となれば幸いです。（田代学・大久保菜央）

会 期：2019年9月28日（土）～12月27日（金）

会 場：当館2階企画展示室

入場料：無料

企画展関連事業：

- 10/22（火・祝）元職員が語る多磨盲人会
- 11/2（土）やってみよう、鈴ボール！盲人会のレクリエーションを体験
- 10/5（土）、11/24（日）、12/14（土）フィールドワーク『望郷の丘』に描かれた多磨全生園を巡る
- 9/28（土）、10/27（日）、11/16（土）、12/22（日）ギャラリートーク

いずれも詳細はホームページをご覧ください。



「追悼 高山勝介作陶展」 開催



「追悼 高山勝介作陶展」の会場

高山勝介さん（1926～2018）は19歳でハンセン病を発病し、1946（昭和21）年に多磨全生園に入所しました。1979（昭和54）年頃ハンセン病の後遺症によって失明しかける経験をし、友人の勧めで陶芸を始めました。以後精力的に作陶を続け、2011（平成23）年2月11日～3月6日に当館ギャラリーにおいて「2010年度企画展高山勝介作陶展」を開催させていただきました。昨年8月3日に高山さんは亡くなられましたが、このたびおつれあいの高山寿美枝さんたかやま す み えから当館ギャラリーでの展覧会開催のご要望をいただき、8月3日（土）～8月23日（金）まで「追悼 高山勝介作陶展」を開催しました。

本展では48点の遺作を展示。前回の企画展では高山さんの歩みを示す写真も多数展示しましたが、今回は故人であることを意識し、写真家船元康子氏ふなもと やす こが撮影した写真1点のみとしました。作品作りにかかる時間と高山さんの集中力・技量を示すため、2010（平成22）年11月撮影の作陶風景の動画（30分）も展示しました。

会期中は多磨全生園の入所者や職員も見学に訪れ作品に見入っていました。ある入所者は作品数の多さに驚き、陶芸を趣味とする一般来館者は、作品一つが完成するまでにはいくつものハードルがあると語り、その質の高さに感嘆していました。

寿美枝さんによれば、亡くなる前、眼が見えなくなり陶芸から遠ざかっていた高山さんに、ある方が陶芸の再開を持ちかけたそうです。その時高山さんは「陶芸をやる」と答え、寿美枝さんを驚かせたとのことでした。周りからは無理に思えても、高山さんは陶芸を諦めていなかったのです。「いきがい」への思いを最後に教えていただいた気がします。（田代学）

夏期イベント開催報告

「ハンセン病と人権夏期セミナー」、映画「ふたたび」上映会、「佐久間建氏講演会」を開催して

当館では7月から8月にかけて例年よりさらに盛りだくさんのイベントを開催しました。ここでは社会啓発課が担当した事業についてご紹介します。

今年で5年目となる「ハンセン病と人権夏期セミナー」には教員だけではなく、一般の方々も含め、総勢66名の方に参加していただきました。回復者のお話、学芸員による講義に加え、今年は前日の7月25日に全生園内の見学も行いました。夏休みの宿題のために参加された親子連れの姿も見られました。

8月17日（土）には2010年公開の映画「ふたたび swing me again」の上映会を行い、総勢180名の方にお集まりいただきました。療養所を50年ぶりに退所し、仲間と再会するための旅に出た元ジャズ・トランペッターと孫との姿を描いた内容に、参加者の方からは「家族訴訟の件もあり、“現在”のハンセン病の問題を考える上でも、とても良い映画だと思いました」という声をいただきました。

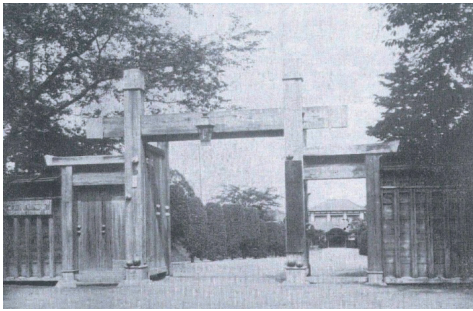
8月25日（日）には、現役で教員をされている佐久間建先生さくまけんをお呼びして、講演会「ハンセン病問題を学び、伝えるということ～学校現場から～」を開催いたしました。長年にわたり、小学校で子どもたちにハンセン病問題を通した人権学習を行っている佐久間先生が、教員を目指したきっかけから入所者との出会い、現在の思いまでお話しくださいました。当日は教育関係者等120名の方がご参加くださり、「教育の場で活かしていきたい」という感想も寄せられました。今後もハンセン病問題をどのように考えていくのか、参加者の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思います。（金貴粉）



佐久間建氏講演会の様子

資料紹介 その⑤

絵はがき「東京養育院正門」



連合道府県立療養所が設置される頃、全国にはすでにハンセン病の病院と私立療養所が存在していました。東京では起廃病院や慰廃園が有名ですが、他にも、東京市が運営する東京養育院がありました。今回は東京養育院を写した絵はがきをご紹介します。

東京養育院は1872（明治5）年に設立された救貧施設で、行路病人や孤児を収容していました。1890（明治23）年東京市営になると同時に、渋沢栄一が院長に就任しました。1898（明治31）年東京養育院に勤務した光田健輔は、翌年ハンセン病患者隔離病室「回春病室」を設置しました。

当時はまだ、ハンセン病の原因は遺伝だと広く信じられていました。しかし光田は、1897（明治30）年にベルリンで開かれた第1回国際癩会議での議論をいち早く取り入れ、らい菌による伝染という“正しい知識”に基づく患者隔離を、全国で初めて行いました。

写真は東京養育院の正門を写しています。1907（明治40）年の撮影で、「明治四十年法律第十一号（通称 癩予防ニ関スル件）」が制定された年のものです。この時まさに敷地の中にある回春病室では、国の対策に先駆けて患者隔離が実践されていました。

光田はこの2年後、開院した全生病院に医長として赴任します。共に回春病室を担当していた看護婦石渡ことも、一緒に移りました。回春病室の患者を全員引き取ったことや、光田がすぐに病室を使いやすく改装していることなどからも、初期の全生病院における予防と治療のノウハウは、東京養育院で培われたものと考えられます。ハンセン病の隔離施設としての東京養育院と全生病院との関わりには、まだよく知られていないことがありそうです。

（稲葉上道）

研究から 義肢装具室訪問

―入所者の日常を支える道具を作る―

6月末、多磨全生園内の義肢装具室へ。手足の欠損や変形を補う道具（義肢装具、自助具）を作り、入所者の生活の自立を支援している義肢装具士の菅野太洋さんと後藤直生さんからお話を伺いました。

ハンセン病療養所では、通常は市販もしくは作業療法士が製作することの多い自助具を、義肢装具士が作っています。この自助具、かつての療養所では患者作業で作られ、補助具と呼ばれていたものです。10年ほど前までは義足の製作・調整を中心に行っていましたが、近年は入所者の高齢化により湯呑みカバーや手の甲にはめるフォーク・スプーン、鍵のツマミ部分を大きく厚くするキーカバーなどの自助具の製作が中心なのだそうです。カラオケが大好きだけど指が屈曲していてマイクを握れない人にはマイクホルダーも！生活の拡がりに合わせて製作の範囲も拡大していく、現場主義の道具たちなのです。

個々の自助具については、製作過程と完成後の修正が細かく記録されています。使用者の困りごとと、その人に寄り添い希望を叶えるための工夫が満載された、貴重な情報です。

義肢装具士のお二人は医療専門職として障がいを知悉し、ご本人と情報交換をしながら自助具を作っています。そのため、それぞれの道具について具体的かつ専門的な解説を得られます。

ハンセン病による障がいはもとより、生活の自立・拡大への挑戦について学び、義肢装具・自助具というモノを介しての表現を考える貴重な機会となりました。

（西浦直子）



左：自分で着脱できるよう留め具を加工した義足
右：目薬をさすための自助具

資料館の現場から その⑪

庶務業務について

今回は、庶務業務について紹介します。主な業務は文書作成やデータ入力、ファイリングなどの事務作業、電話対応などです。また、来館者のみなさまにお渡しするパンフレットなどの発注や管理、啓発DVDや施設の貸出なども行っています。仕事は多岐にわたりますが、資料館を多くの方に気持ちよく利用していただくために、どの仕事も常に利用者の目線に立って行うよう心掛けています。

私は国立となる前年の2006(平成18)年からこの資料館に勤めています。しかし、それ以前からハンセン病資料館設立を掲げた^{とうふうきょうかい}藤楓協会の事務職員として資料館の設立に関わっていました。平成に入ったばかりの頃です。

当時、私は事務作業の他に、協会職員が各企業に資料館の建設資金の寄付のお願いに回るために必要な地図を作成していました。^{おおたにふじ お}大谷藤郎理事長を筆頭に全職員が一丸となって資料館建設に向けて情熱をもって取り組んだ多忙な日々を思い出します。

また、入所者の^{ひらさわやす し}平澤保治さんや地域の高校生とともに久米川駅前での募金活動にも参加しました。この募金活動は、資料館設立について地域住民の理解を得るために行ったもので、ハンセン病回復者自身が街中に立ったことは意義の大きいものでした。

1993(平成5)年に「^{たかまつのみや きねん}高松宮記念ハンセン病資料館」という名前で資料館が開館した時は、携わった方々の努力が実って本当にうれしかったです。これからも多くの方々に入所者の方々の想いがつまったこの資料館に足を運んでいただければと思います。(熱田純江)



西武新宿線久米川駅でのハンセン病資料館建設募金活動 1992年写真中央の募金箱の後ろに立つのが筆者。一番右は平澤保治さん。

お知らせ

■第33回ハンセン病体験講話

講話者：伊波敏男さん

日にち：2019年10月13日(日)

■没後60年・志樹逸馬展

会期：2019年11月9日(土)～12月1日(日)

会場：当館1階 ギャラリー

関連イベント：11月17日(日)

^{わかまつえいすけ}若松英輔さん講演会「志樹逸馬の詩と出会う」

■ミュージアムトーク

ハンセン病問題に関する連続セミナーを開催します。

第1回 「ハンセン病療養所の詩人たち」

木村哲也(当館学芸員)

日にち：2019年10月12日(土)

第2回 「ハンセン病問題と在日朝鮮人」

金貴粉(当館学芸員)

日にち：2019年11月9日(土)

■各イベントの詳細、今後の情報につきましては、当館HPをご覧ください!



当館HP

利用案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日 毎週月曜日(祝日の場合は開館)
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([ハンセン病資料館]下車)
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
([ハンセン病資料館]下車)
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
([全生園前]下車、徒歩10分)
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>